

保育を語ること、伝えること

企画：古賀 松香（京都教育大学）・掘越 紀香（国立教育政策研究所）
 話題提供：佐藤 寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園）
 川崎 徳子（山口大学）
 古賀 松香（京都教育大学）
 指定討論：掘越 紀香（国立教育政策研究所）

近年幼児教育の重要性が世界的に注目され、保育の質の向上を目指した研修や実践研究が重視されている。研修では、研究テーマに沿った事例の検討が行われることも多い。一方、日々の保育の中で、実践者は心に留めたいと願う場面と出会うことがある。そのような場面や展開を取り上げ、事例として語り、記述することは、自らの実践を振り返り、なぜ心に留めたいと感じたのか、何を伝えたいのかを明確化する過程であり、その質感をどのように伝えるか模索する過程でもある。受け手である実践者や研究者は、その事例や語りを通して伝えたいことを共有しようと努め、その実践の面白さや葛藤を味わい、その解釈を深め広げる責任を担っているのではないか。

本シンポジウムでは、語ること、伝えることを通じた実践者と研究者との共有・生成と責任について、それぞれの立場から話題提供いただき、議論を深めたい。

子どもの心もちに寄り添えるように…

佐藤 寛子

保育の一日を終え、ホッとするのも束の間、今日の子どもたちとのかかわりのあれこれが頭の中に浮かぶ。あの子は、あのとき何を伝えたかったのだろう…その思いに十分に伝えられていたのだろうか…ふつふつと浮かんできたことを、こうだったのかもしれない、ああだったのかもしれないと自分の中で改めて考える。明日のその子との出会いやかかわりにつながりそうな何かがおぼろげに見えてきたときに初めて、その出来事を誰かに語りたと思う。私というひとりの保育者と子どもたちとの関係の中で起こった（だからこそ起こったことも含めて）、その日そのとき限りの出来事。当事者である子どもたちは決して語ることはないゆえに、他の保育者や研究者と共有することで、私の理解を超えた、その時の子どもたち一人ひとりの心もちにより近づくことができるのではないか。そこから、子どもの世界を感じ、保育のありようへと思考を深めていければと考えている。

保育を振り返り語る中にあること

川崎 徳子

私にとって「保育を語る」ことは、保育者として立ったその時から始まっていたように思う。日々の保育後に環境整備や教材の準備をしながら、同じ場で過ごす保育者にその日の子どもの姿や心に残っている出来事を取りとめもなく語り聞いてもらった。その後も語り合う場として開かれた中で、また、記述することで保育を言葉で表しながら、私は振り返り語る日々を繰り返し、保育者として必要な子どもと保育を考えるための思考を鍛えてきたのだと思う。生活である日々を大事にしながら、一方で、子どもの生きている世界に少しでも近づけるように、自分の保育の場の実感を思い起こし言葉を紡ぎ、その時の状況に向き合い、その中で私は次の保育に繋がる子どもへの思いや保育の方向を確かめようとしてきたように思う。そして、現在の私が保育を語ろうとすることは、保育を辿りながら触れていくその実感と保育者の思考の過程が、聞き手に感じられるように、聞き手自身の保育や保育の場の体験を思い起こす思考に触れていくように投げかけられる表現を求めているかもしれない。

見えないものに寄り添う力が生み出すものとは

古賀 松香

「私は研究者として、実践者の言葉や実践の意味をきちんと受けとめられているだろうか。」これは常に私の中にある問いである。しかし、そもそも実践の質感というものは言葉にならないものである。写真や映像は質感を伝えるように思えるが、それだけを提示されても、どう意味づけるかは非常に多様な可能性がある。エピソード記述や語りの中で感じられる質感とは、言葉にされた中から読み手／聞き手が言葉にならないことを感じとったものだ。エピソードや語りにある力とは、言葉にならないものの重要性を言葉から感じられるものにするのであるならば、読み手／聞き手としての研究者は、その感じとったものを再び言葉の世界で整理して、概念の力をもって伝えていく役割があるだろう。実践者の言葉と研究者の言葉が、言葉にならない質感を真ん中にして生み出すものについて考えたい。